

ちく のう しょう  
**蓄膿症**  
びく びく えん  
**～副鼻腔炎について～**

はじめに

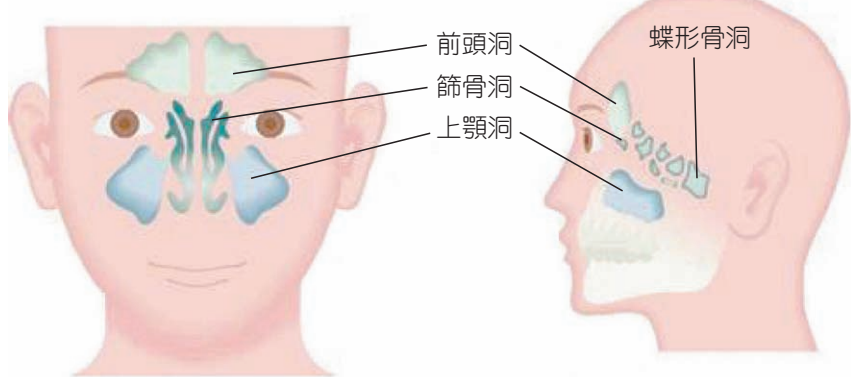
耳鼻咽喉科医として診療をしていると、蓄膿症の患者さんに遭遇しない日はありません。蓄膿症とはそのくらいありふれた病気です。では、蓄膿症とはどのような病気なのでしょうか。今回はこの場をお借りして蓄膿症について解説していきます。

蓄膿症 = 副鼻腔炎とは？

蓄膿症という病名は俗称で、医学的には副鼻腔炎といいます。

副鼻腔とは、顔面骨の中に形成された空洞のことです(図1)。大きく分けて、4つのエリアに分かれており、上顎洞、篩骨洞、前頭洞、蝶形骨洞、という名前が付いています。

図1 副鼻腔の構図



監修：東京大学耳鼻咽喉科教授 山崎達也 先生

杏林製薬資料より

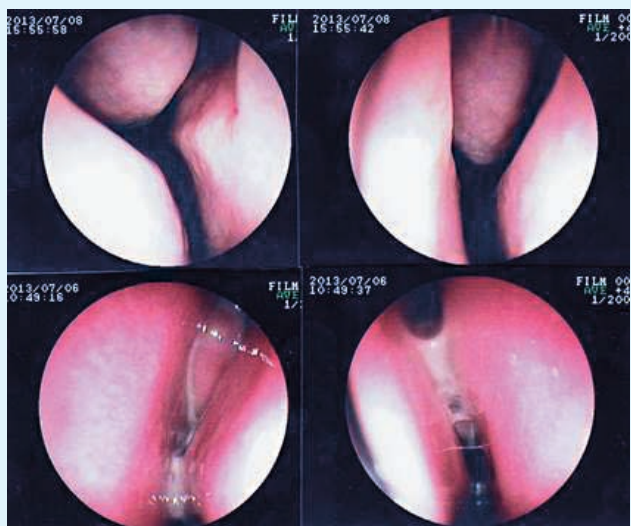
これらは、鼻腔と小さな穴でつながっており顔面の骨の中に空気を蓄えています。なぜ、顔面の骨の中に空気が必要なのかというと・・・

- ①呼吸時の加湿、加温のため
- ②発声時に音響効果を出すため
- ③顔面骨を軽くするため
- ④顔面に強い衝撃を受けた時に衝撃を吸収して眼球や脳を保護するためなどが考えられています。

副鼻腔炎はこれらの空洞に膿がたまった状態のことなのです。したがって、蓄膿症という呼び方は副鼻腔炎の状態をうまく表現しています。鼻かぜやアレルギーなどが原因となって発症することが多いです。簡単に言えば、鼻かぜがひどくなった状態と言ってよいでしょう(写真1)。

写真1

上段が正常、下段が副鼻腔炎の内視鏡写真。それぞれ左右の鼻腔を撮影。上段の写真ではすき間が多く、鼻の通りが良いのがわかる。下段の写真では粘膜が腫れて鼻がつまり、副鼻腔からあふれ出た膿が見られる。



筆者撮影

蓄膿症 = 副鼻腔炎の症状

症状は膿性鼻汁(黄色や緑色で嫌なにおいのする鼻水)が多く出たのどに垂れる、鼻がつまる、においがわからない、などが主です。ひどくなるとおでこやみけん、目の奥、頬、などが痛くなってきます。

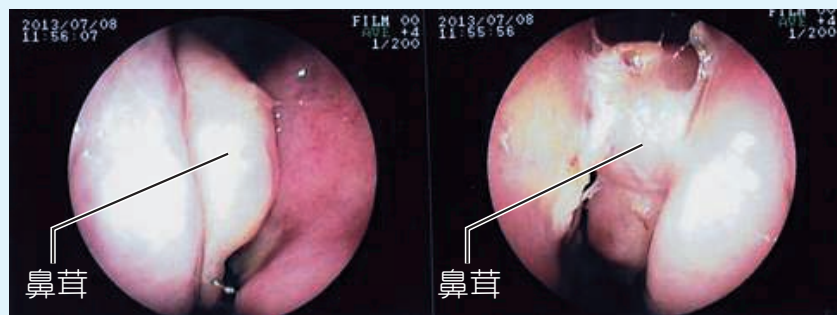
また、副鼻腔炎から中耳炎や扁桃炎、咽頭炎を引き起こすことがあります。特に子供は中耳炎を併発することが多いので注意が必要です。

副鼻腔炎の治療

耳鼻咽喉科で鼻の中の膿を吸い出したり、鼻の通りを良くする処置を行います。これにより副鼻腔にたまった膿が排出しやすくなります。このような処置を適宜行い、抗生物質などのお薬を1~2週間内服するとほとんどの場合軽快します。

しかし長く放置すると粘膜が厚くなったりポリープ(鼻茸)ができたりして、細菌が繁殖しやすい状態となり慢性化します(写真2)。鼻づまり、鼻汁、頭痛、頭重感などの不快な症状が継続して日常生活に支障が生じます。外来通院でもある程度改善することはできますが、治療効果が見られない場合には手術が必要になります。

写真2 副鼻腔炎が慢性化して鼻茸が生えてきた状態。黄色い部分が鼻茸。



筆者撮影

以前は歯ぐきや眉を切開して行う手術が多かったのですが、十数年前からは内視鏡手術が一般的になりました。内視鏡手術の利点は、切開を行わず鼻の中から手術が行える、手術後顔面が腫れない、手術後の痛みが少ない、細部まで観察できるので安全に行える、などがあります。副鼻腔は脳や眼と接しているため内視鏡を使った慎重な手術操作が必要です。最近では副鼻腔手術専用の医療器具は非常に進歩し、より安全な手術が可能となっています。

最後に

副鼻腔炎はその都度きちんと治療していれば怖い病気ではありません。しかし放置しておくと、慢性化したり、特に小児では中耳炎、咽頭炎、扁桃炎など周囲に炎症が広がることしばしばあります。アレルギー性鼻炎をお持ちの方は特になりやすいのでご注意ください。気になる症状があれば、お気軽に耳鼻咽喉科にご相談ください。

(相模原市医師会 伊與田 貴之)

